

【特集】

医療の最前線を担う 「命の司令塔」

― 医者の真価を育成する高度救命救急センター ―

万一の時の頼れる存在として、私たちの社会に欠かすことのできない救急医療。つねに医療の最前線に位置しながら、多くの尊い命を救っています。

岐阜大学医学部附属病院は、そんな救急医療の重要性を踏まえ、岐阜大学医学部附属病院は、そんな救急医療の重要性を踏まえ、

「中部地方における命を救うための最後の砦」となる全国トップレベルの高次救命治療センターを有し、

いわゆる臓器別診療体系における「専門医」と一線を画した「救急指導医」を育成。

高度な治療を総合的に行う先進の設備・環境を整え、救命医のみならず、
高度な治療を総合的に行う先進の設備・環境を整え、救命医のみならず、
各科専門医を目指す医者の卵たちにとっても付加価値の高い学びの場を提供しています。

岐阜大学医学部附属病院が築く

救急医療の新潮流。

数年前から社会問題化している救急患者の「たらい回し」。

そこには絶対的な医師不足と、未成熟な救急体制の問題が複雑に絡み合っています。

もちろん岐阜県として例外ではありません。面積が広く、県土の約80%を山間地で占めるこの地では、かつて県民の多くが「大怪我をすると助からない」という認識を持っていました。

しかし、今やその認識も岐阜大学医学部附属病院の存在と組み合わせによって、大きく変容しています。

「岐阜に住んでいれば安心」。誰もがそう思う先進の救急システムもいよいよ運用開始。

救急医療は、岐阜大学医学部附属病院から変わるのです。

最適施設に最短時間で
患者を搬送するために。

救急医療情報共有支援システム
GEMITS（ジェミッツ）を共同開発。

岐阜大学医学部附属病院の小倉
真治教授がプロジェクトリーダー
となり、岐阜大学と沖電気工業、デ
ンソー、インターネットITS協議
会（IIC）などが共同で開発し
た「救急医療情報共有支援システ
ム（GEMITS：Global Emergency
Medical support Intelligence
Transport System）」。

これは救急車等の搬送車両に搭
載した端末と医療機関、岐阜大学
内の「情報統合センター」をネッ
トワークで結び、患者情報をもと
に瞬時に適切な搬送先を探し出し、
医師が迅速に治療を開始でき

るようサポートするシステムです。

その仕組みは、まず現場に駆け
つけた救急隊員が、車載ITシス
テムで患者の傷病情報を音声入
力し、さらに患者が携帯するIC
カード（MEDICA）から血液
型や病歴、アレルギーの有無等を、
携帯端末で読み取り「情報統合セ
ンター」に送信。すると同時に、
患者の治療に当る医師の居場所や
「手術中」「診察中」といった状況、
病院のベッドの空き情報などが自
動的に収集され、センターがこれ
ら情報を調整し、救急隊員に連絡
指示を送るという流れです。

救命率をアップし
後遺症等の影響を最少限にする
理想の救急医療体制の確立

NEW
情報統合
センター



今、患者の治療に最適
な医師のいる最適な施
設に、最短時間で搬送
するための指示を、現場
に即座に返答すること
が可能。

患者の情報を
センターに送信

氏名	生年月日
最終更新日	
既往の病歴	投薬歴
アレルギー	血液型
緊急時のメモ	
緊急時の連絡先	

病院と医師の情報を
リアルタイムで収集

病院	〇〇〇病院
ベッド空アリ	
医師	〇〇〇先生
救急センター	〇〇〇先生
診療中	

〇〇〇病院へ
向かってください。

NEW



メディカカード

NEW



専用読取端末

NEW



ドクターヘリ

NEW



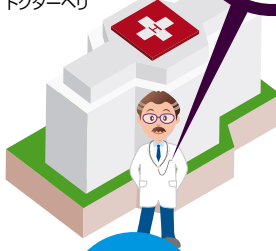
ICタグ



消防



現場



病院

患者情報の収集に役立つ
MEDICA（メディカ）カードも開発。

前述したGEMITSに欠かさない情報収集手段の一つが、患者の様々な情報を書き込んだICカード「MEDICA」。そこには氏名、生年月日、性別、血液型、病歴、投薬歴、アレルギーや感染症の有無など、厳選された情報のみが登録されます。こちらは09年5月から、岐阜県内5市8町1村の救急隊に端末を搭載するとともに実用化が始まっており、すでに実際の救急現場で貢献しています。そして今年の秋までには、岐阜県全域で加入が可能となり、カードの情報を読み取る専用端末も、県内すべての救急車両に搭載される予定です。

MEDICAカードを携帯することは、スムーズな救急医療を受けたいという患者側の意思表示となります。



カード内登録情報／MEDICA ID、病院名、更新日、氏名・カナ、生年月日、血液型、既往歴、投薬、感染症、その他の有用情報

現場教育の幅を広げる
ドクターヘリの運航。

2011年2月9日に運行開始した岐阜県ドクターヘリ。ヘリポートは岐阜大学医学部附属病院の屋上にあり、出動要請があると、院内の救急専門医と研修医、看護師を乗せて現場に赴きます。ドクターヘリの運行は、県内の救命率向上につながるのはもちろんですが、研修医にとって「人の命を助ける」という医療の原点を学ぶ実践の場としても大きな役割を果たします。各科の専門性に加え救急専門医の技術と知識を身につけることを可能にしたレベルの高い教育環境とシステム。岐阜大学医学部ならではの付加価値がここにあります。



出動要請から5分以内に医師を乗せて飛び立つことのできるドクターヘリ。従来よりも室内の広いタイプが配備されており、患者をストレッチャーに乗せたまま、医師ら4人が搭乗可能となっている。

岐阜から全国、 そして世界へ。

救命率を上げるための最大の要素は、最適な治療が行える施設へ最短時間で患者を送ること。GEMITSもMEDICAもドクターヘリも、すべてはその目的を果たすために前進しています。さらにGEMITSの普及により時間のロスが無くなり、現場の最適化が図れば、医師の負担が軽減され医療の質の向上にもつながっていくとの見方もあります。

現在、GEMITSは岐阜大学医学部附属病院を中心に他病院を指定し実験的な運用が始まったばかりですが、その研究成果に全国の行政・医療機関が注目し期待を寄せています。岐阜から全国、そして世界へ。岐阜大学医学部附属病院の救急体制とシステムが、理想の医療を牽引していきます。

高次救命治療センター

大都市圏以外では極めてまれな、救急医療に対する高い技術と豊富なマンパワーを有する岐阜大学医学部附属病院の救急部門。設立後の2006年2月に高度救命救急センターに指定され、岐阜県の救急医療の最後の砦として、県内外の一次二次医療機関はもとより、三次医療機関の救命救急センターからも紹介があることが特徴です。地域の中核病院として救急指導医、救急専門医以外に院内の各専門領域の医師が専従し、総合的・集学的で高度な診断・治療を行うとともに、地域住民・救急隊・病院を連携した病院前救護体制の整備を担っています。また災害医療にも積極的に取り組み、DMAT（災害医療支援チーム）としての活動も行っています。